

E—31 環境の変化にともなう身体と嗜好に関する研究——その2

昭和女大文家政

加藤 澄江

三石 礼子

伊藤喜佐子

○掛塚 芳子

外島 幸子

1. 本学寮生を対象として、本人と家族の嗜好上の相互の関係については「その1」で述べたが、本報ではおもに環境の変化にともなう喫食状況、食欲の有無について比較検討した。

2. 本学40年度入寮生 219 名、41年度入寮生 200 名を対象とし、生活環境を農村型、都市型に区分し、喫食状況については、記入法を用い、一般に多く用いられている食品 44 種について調査した。なお、40年度入寮生は、40年6月、12月、41年6月の継続調査した。

3. (1)環境への順応性には個人差はあるが、食欲面については、あまり顕著な結果は得られなかった。しかし、不規則な受験時代と異なり、規則的な寮生活のため、食欲が増加したものがみられた。(2)喫食状況については、かつて非常に偏食傾向を持っていた者が多かったが、比較的短期間に改善された。特にチーズ、牛乳、生卵、鯨肉、ベーコン、納豆、みょうが、セロリーなどに対して偏食が多かった。このうちチーズ、牛乳、人参などは50%以上喫食できるようになった。ベーコン、みょうが、セロリーなどは改善率が低い。(3)喫食できるようになったのは、自らの努力、栄養上の必要性、調理法による理由が多い。(4)40年度、41年度を比較すると、牛乳・ハム・納豆・さばについては后者の改善率が極めて高かった。